
認知機能の低下がみられる高齢者の体験過程に関する一考察

—構造拘束の視点から—

On Experiencing in the Elderly with Impaired Cognitive Functioning : An Examination from the Viewpoint of Structure Bound Experiencing

磯部智代

関西大学臨床心理専門職大学院

Tomoyo ISOBE

Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

現在日本は高齢化が進み、認知症高齢者の割合も増加していることから、高齢者への心理的援助が注目されるようになってきている。本論文は、認知機能の低下が見られる高齢者との面接から、体験過程の様式についてジェンドリン（1999b）のパーソナリティ論を基に検討することを目的とする。注意機能の低下が推測される90代男性と、過去に約束が覚えられず、意思疎通に齟齬があった70代女性と面接を行う。状況の変化に関わらず同じ内容が繰り返し語られ、気持ちに触れずに出来事を語るという前者の事例の特徴から、認知機能の低下がみられる高齢者の体験過程様式は構造拘束されていることが示唆された。後者の事例では気持ちを明確に言語化できてはいないが、気持ちに触れようとする試みがされており、双方向的なコミュニケーションが困難である前者の事例と比べると、構造拘束の程度が軽いと考えられた。これより、構造拘束の程度が重度であると体験過程の暗在の働きが生じにくくなり、疎通性も低くなることが示された。また、体験過程の構造拘束を高齢者の認知機能に適用して研究した例はないが、認知機能の低下を伴う高齢者には体験過程の狭窄という意識の特徴があることが示唆された。

キーワード：高齢者、認知機能の低下、体験過程、構造拘束

Abstract

In Japan, psychological assistance for the elderly has gained increasing attention with the rapidly aging population. This paper studies the manner of experiencing from interviews with two elderly persons with impaired cognitive functioning. The interviews are with a man in his nineties with supposed attention disorder and a woman in her seventies with reported episodes of impaired memory. The interview with the elderly man with impaired cognitive functioning suggests 'structure bound experiencing' as observed by Eugene Gendlin, an American philosopher

and psychotherapist. In such a mode of experiencing, he cannot come into touch with his feelings, and narrates the same contents despite changes in the situation. The elderly woman was able to express her feelings, suggesting a milder degree of structure bound experiencing. It can be suggested that the more the degree of structure bound experiencing, the more the difficulty in recovering the implicit functions of experiencing. Although no studies have previously considered impaired cognitive functioning in the elderly from the viewpoint of structure bound experiencing, this paper suggests that impaired cognitive functioning can be characterized as a mode of consciousness with constricted experiencing.

Keyword: elderly, cognitive impairment, experiencing, structure-bound.

問題・目的

現在日本は、平均寿命の延伸や少子化の進行による高齢化社会を向かえ、国立社会保障・人口問題研究所（2012）によると高齢者の割合は2010年の時点で総人口の23%となり、今後も増加が予想されている。さらに認知症高齢者も増加傾向にあり、2013年には25.1%、つまり4人に1人が認知症であるとも予想されている。認知症を含む高齢者の増加という社会的背景から、近年高齢者への心理的援助が注目されるようになってきている。

高齢者への心理的援助として代表的な心理療法に、その人生の歴史や思い出を、受容的・共感的に聞き手が聞き入ることを基本とする回想法があり、回想法では感情の安定やコミュニケーションの促進、楽しく創造的な時間をつくるといった効果があるとされる（黒川、松田、丸山ら 1999）。高齢者は思い出や記憶が呼び起こされやすくなる傾向が増し、回想することは高齢者にとって馴染みのものである（市岡、2000）。しかし、高齢者への心理的援助においては回想法の他にも箱庭療法などの芸術的方法（原、2008）や、学習療法（田島、長沼、石毛、2008）というような機能訓練などの目的も兼ねて行われているものが多く、セッションでの語りを基にした高齢者の心理学的な変化を考察した研究は少ない。

そこで、高齢者、特に認知機能の低下を抱える高齢者の心理について、体験過程理論を基に

検討したい。体験過程とは、フェルトセンスに触れ、そこに内在している意味を言い表す過程のことである。このフェルトセンスを言い表していくうちに何かが変化することがある。体験過程で扱うフェルトセンスは怒りや悲しみ、喜びなどという情動と似て自律的に訪れるものであるが、「普通の言葉やカテゴリーでは表現できないほど複雑なものであり、全体的で（wholistic）暗在的な（implicit）身体的な意味感覚である」（ジェンドリン、1998、pp.107-108）。フェルトセンスに触れることで、回想法のように過去の思い出や現在の自分に対して肯定的なとらえ方ができるというような効果が得られる可能性が考えられる。

高齢者の体験過程に関して、市岡（2000）がEXPスケール（体験過程の様式を段階的に測定するスケール）を用いて高齢者の体験過程レベルの測定を試みている他、Sherman（1987）の研究などがある。さらにジェンドリン（1982）によるとEXPスケールで高い得点を取った高齢者たちは、10年後の生存率が有意に高いという記録も残っている。しかし、認知症の体験過程は未だ明らかにされていないのが現状である。そこで、認知症高齢者の体験過程を検討することで、認知機能面からだけでなく、より多角的に認知症を捉えられる可能性があり、認知症高齢者への心理的援助へ何らかの一石を投じることができると考える。

以上より、本研究では高齢者との面接から、認知症高齢者の体験過程の様式についてジェン

ドリンのパーソナリティ論を基に検討する。

方法

協力者：認知機能に障害があるが、言語的コミュニケーションを取ることが可能な方をデイサービス利用者から数名、特別養護老人ホームの職員に推薦していただいた。協力者には、事前に高齢者がどのようなお気持ちで過ごされているのか知りたいという主旨の説明をし、ご本人とご家族に同意が得られた方2名（男性1名、女性1名）との面接を行った。

面接者：筆者。筆者は臨床心理専門職大学院で学んでいる。

手続き：X年11月中旬、1人30分～1時間程度の面接を行った。この面接では、協力者の負担を考慮し、日常的な事柄をテーマとした面接を行う。面接はICレコーダーで録音し、後日録音をもとに逐語記録を作成した。記録に見られた体験過程の様式を詳細に検討した。

事例

以下に、協力者の特徴と、筆者との面接の概要を記述する。協力者の発言を「」、筆者の発言を〈〉として示す。

事例1：Aさん（90代男性）

〔協力者の特徴〕 Aさんは、MMSEが22/30点であり、認知障害は境界域であるが、Serial 7sに誤答があることから注意機能の低下が推測される。身体的な障害はない。普段から他者に知識や経験を教えるという役割を大切にしており、特に戦争や御陵について他者に伝えている。〔面接概要〕 大正天皇の在位が短かったことについて語り始め、Aさんが戦争に行っていたことについて話題は移る。筆者が〈戦争に

行かれてたんですね？〉と尋ねると、「そんなこと知らんでしょ？聞いたことないでしょ」と生き生きとした口調で話し出す。その後も何度か「そういうことあんまり知らないでしょ？」「聞いたことない？」と筆者に尋ねる。Aさんは終戦になった日だけでなく、Aさんが招集された日付けや訪れた戦地の地名など詳細に述べながらAさんの戦争体験について語る。

上陸演習が話題に上り、筆者が〈訓練とはいえ、怖いとかいうのはありましたか？〉と聴くと、Aさんは「それで帰ってくるだけの、いわゆるアメリカの上陸用舟艇で、日本の船はあらへんから、全滅やった」「まあまたもとの会社と言うたらなんやけどね、飛行場に帰ってきた」と、終戦を迎えたときの様子を語り出す。終戦を外国で知ったが、すぐには日本に帰ることができなかったことが語られ、筆者は〈そのときどんなお気持ちですか？〉と聴くと、Aさんは「いや、何もあらへんけどね」と返す。その返答に筆者は少し戸惑い、〈何もないですか？〉と聴き返すと、「敗戦ということだけ聞いてったけどね」と言い、日本に帰るのに遠回りしないと帰ることができなかったことを語る。筆者が〈日本に戻ってきて、ああ終わったなーっていう感じはありますか？〉と尋ねると、それには答えずに、日本に帰るまでに終戦から1年程かかったことを語る。〈向こうの（戦地での）生活を思い出すと全体的にどんな感じがしますか？〉と聴くと、Aさんは「そやからその間、いろんなことみなラジオを聞いてね」と筆者の問いかけには答えない。

そして日本に帰るまでのことや鉄道隊にいたときのことを語る。鉄道隊として銃を持って汽車に乗っていたが、実際に戦闘することはなく、「そやから中国に遊びに行ったようなもんや」と笑う。冬のソ連や中国での様子や、赤紙ではなく電報で召集されていたことを語る。戦時中の物価について、「今とは違うから。ビールでもあれいくらか、20銭くらいかな」と語り、〈今とは違うなあとびっくりしました〉と感想を伝

えると、「その頃の物価はみな安いもんね」と応じる。戦後も百貨店前などで赤紙の見本が配られていたと語り、Aさんはお手洗いに席を立つ。

席に戻ってきてから、施設の屋上から近くにある御陵が見えると言い、御陵について話題が変わる。全国に5つ御陵があり、御陵の案内所への行き方を筆者に教える。そしてAさんは、御陵に奉られているのは天皇で、明治天皇が教育勅語を掲げたと話す。そこからAさんの名前の1字の由来が教育勅語にあることを語る。筆者がもう1字の由来や自分の名前が好きかどうか尋ねるも、Aさんは教育勅語に由来がある1字について説明を続ける。Aさんは国語辞書や歴史書を読むことを勧め、筆者は勉強しようと思うと伝え、終了とする。

事例2：Bさん（70代女性）

〔協力者の特徴〕 Bさんは、右半身に障害があるため、介護度は5であるが、現在認知機能に関する生活上の問題はないとされている。過去には約束など記憶できずに勘違いから周囲との意思疎通に齟齬があった。現在はデイサービスを頻繁に利用するようになり、友人や職員との会話を楽しんでいる様子が見られる。

〔面接概要〕 筆者が「最近のデイはいかがですか？」と尋ねると、「楽しく行っているよ」と答え、気が合う友達がいて、「毎日来てたら楽しい。休みなったら寂しい」と話す。出身地が施設がある県とは異なる都道府県であり、「ひとりぼっちと一緒にね」と言う。「ちょっと寂しいですか？」と聴くと、「うーん、そんなないよ」と言い、友達や施設職員がよく声をかけてくれることを語る。また、途中で「私らみたいなの口下手やし」「上手く言えないけど、ごめんね」と話す。

Bさんの夫が話題に上り、Bさんは結婚当初を振り返り「えらいおじいさんとお見合いして」「よう来たな」「そのときそない思わなかったけどな」「ほんまよう結婚したな」と自分の中では思うわ」と語る。これまで家業を継いで責任あ

る仕事をしてきた夫には楽をさせてもらい、おいしいものを食べに行ったり、旅行に行ったりしてきた。Bさんは夫と年齢が「9つ違い」であると言い、筆者はそれに驚いた顔を見ると、Bさんはそれを見て「どう思った？」と笑う。〈Bさんの今までの人生を振り返ってみると、どんな言葉になりますか？〉と問いかけると、「うー、どう言うていいのかな。そういうのが難しいねん」とBさんは困惑した様子を見せる。〈なんとなく良かったなあっていう感じはありますか？〉と聴くと、「まあ良かった。恵まれてたんかな」と言い、夫によくしてもらったと話す。普段厳しいことを言うてしまうことがあり、かわいそうだと感じることもあるが、夫には「感謝してんねん」、そのような夫婦関係も「運命やなあ」と言う。

考 察

ジェンドリン（1999b）は「人格変化の一理論」の中で、体験過程の様式について記している。本論文では、ジェンドリンの体験過程様式に関する記述を基に、面接を行った事例を考察していく。

凍結した全体（Frozen wholes）

Aさんは戦争と御陵について、面接聴取以前にも何度か筆者に対して語っている。それだけでなく、同様の内容を他の人に対しても語っていることから、Aさんはすべての人に対して同じような反応をしていると考えられる。つまりそれは、ジェンドリン（1999b）の記述する「私は彼がひとつの権威であることにのみ反応するのであって、一人の人間としての彼や、彼が現在もっている実にさまざまの側面や他のどの状況とも異なった、私たちのこの状況そのものには反応していない」（p.203）と一致するのである。Aさんは聴き手がひとつの権威（若者もしくは施設スタッフ）であることにのみ反応し、戦争体験のない筆者に教えるなどするのであ

て、筆者という1人の人間としての面接者や、筆者の性格や性別、年齢などさまざまな側面や、他のどの状況とも異なったAさんと筆者の今ここで起こっているこの状況には反応していない。ジェンドリン(1999b)はこのような型について、「いずれもからっぽの単なる輪郭線にすぎない」(p.203)と記述している。体験過程が進行していれば、「いかなる瞬間の体験も私が暗に体験している新鮮な細部に満ちている」(ジェンドリン, 1999b, p.203)はずである。Aさんは、「そんなこと知らんでしょ?」「聞いたことない?」と繰り返し尋ねているように、普段から教え教えられる関係に拘束されやすく、記憶や知識を伝達するためだけの語りとして体験様式が構造に拘束されてしまっていると考えられる。

ジェンドリン(1999b)の記述を事例1にあてはめ直すと次のようにも考えられる。例えば仮に筆者がどんなに退屈で会話がはずまない相手であったとしても、Aさんの体験過程が構造に縛られているとすれば、Aさんは退屈な筆者でさえも、Aさんが前から持ち続けてきた構造を体験するための手がかりとして体験される。それ以外に、Aさんが真に面接者の退屈な感じそのものを体験することがないということである。つまり、仮に筆者のことをなんと退屈な人だ、と思ったのなら、Aさんは筆者と話をすることを止めれば良い。しかし、Aさんは話をやめることなく、もしくはAさん自身が筆者を退屈だと感じていることさえも、気に止めずに語り続けている。これは、拘束された構造を体験するための手がかりとしてのみ、筆者の退屈さが存在しているということになる。これは、「からっぽの輪郭線だけを体験し、こうしたからっぽの感情だけを感じて」(ジェンドリン, 1999b, p.203) いるということであり、「現在というもののもつ無数の新鮮な細部を欠くとき、私の体験過程はその様式において構造に拘束されている(structure-bound)」(p.203)と考えられる。ジェンドリン(1999b)は構造に拘束されている体験について、「凍結したひとつの全体」

(p.204)であると論じており、Aさんとの面接では凍結した構造が語られているといえる。

また、ジェンドリン(1999a)は、「人間が生きるプロセスは文化的プロセスであるため、社会的責任や社会的活動の感覚(sense of social responsibility and action)がなければ萎縮してしまう」(p.102)と記述している。さらに、社会的側面の加齢は、社会活動の低下や対人交流の減少に代表され、年齢が高くなるほど経験しやすくなる(権藤, 2008, p.24)。すなわち、高齢になるほど社会との関わりに関する喪失体験が増え、構造拘束が起こりやすくなるのではないだろうか。

反復性対変容可能性

(Repetitive versus modifiable)

筆者は〈向こうの生活を思い出すと全体的にどんな感じがしますか?〉とAさんに問いかけているが、Aさんは「その間、いろんなことみなラジオを聞いてね」と終戦の知らせをラジオで聞いたことを話している。戦争当時の気持ちについては「何もあらへんけどね」と話している。筆者は戦争時と現在における感情の語りを要請しているが、これをAさんは「敗戦ということだけは聞いていた」と事実を語り、現在振り返ってみることができていない。ジェンドリン(1999b)が反復性対変容可能性の項目で「単に構造だけの凍結した全体の中では、体験過程は現在の細部と相互作用を起こすことはないので、その構造が現在のことによって変容されることはない」(p.204)と論じているように、筆者が体験過程に触れるような応答をしてもAさんの体験過程は現在のことによって進行してはいない。したがって、Aさんの体験は多くの状況においておよそ変容されることはなく、反復されて語られていくと考えられる。

最適の暗在的作働

(Optimal implicit functioning)

ジェンドリン (1999b) は構造拘束に関して次のようにも述べている。「私たちが、いろいろの内容や『体験』について話すときに、往々にしてそれらがあるすでに一定のそれ自らの構造を持った、形にはまってしまった単位であるかのように考えていることがある。しかしながらこのことは、私の体験過程の様式が構造に縛られている程度に応じて決まってくる」(p.203)。Aさんは筆者の〈訓練とはいえ、怖いとかいうのはありましたか?〉や、〈日本に戻ってきて、ああ終わったな—って感じはありますか?〉という当時の気持ちに関する問いかけには答えず、「それで帰ってくるだけの、いわゆるアメリカの上陸用舟艇で、「まあまたもとの会社と言うたらなんやけどね、飛行場に帰ってきた」と戦争についての話を続けている。また、戦時中の物価について〈今とは違うなあとびっくりしました〉という筆者の感想を伝えると、「その頃の物価はみな安いもんね」と返し、筆者の感想を受けた発言というよりも、これまで話してきた物価についての話を続けている。このように聴き手の発言に沿わない応答を続けることが、面接全体を通して頻繁にみられ、双方向的なコミュニケーションが困難であった。しかし、終戦後すぐに帰ることができなかったときの気持ちについて「何にもあらへんけどね」と答えたり、鉄道隊として中国にいた頃のことを「そやから中国に遊びに行ったようなもんや」と話したりと、戦争に行っていた当時へ思いを馳せる場面も見られた。Aさんの体験過程の様式が完全に構造拘束されているとは言い切れないが、拘束の程度は高いと考えられる。

一方、事例2のBさんは結婚した当時について、「よう来たな」「そのときそない思わなかったけどな」「ほんまよう結婚したな—と自分の中では思うわ」と回想して語る。またBさんの「9つ違い」という発言に聴き手が驚いた顔をする、それに対してBさんは「どう思った?」と

反応している。Bさんは結婚を現在において捉え直し、現在の聴き手との間に起こっていることに反応している。AさんとBさんを比較すると体験過程の様式が構造から拘束を受けている程度がBさんの方が低く、そしてAさんの方が疎通性が低いと考えられる。つまり、構造拘束の程度が高くなると、話をしている人との間に暗在しているものを感じるができず、したがって疎通性も低くなる。ジェンドリン (1999b) が最適の暗在的作働として「体験過程の様式が構造から拘束を受けている程度に応じて、体験過程の暗在の働きの生じにくくなるということは明らかである」(p.204)と述べていることに通じる。

これまで考察してきたように、特にAさんは体験過程の様式が構造から拘束を受けているといえるだろう。Aさんは注意機能が低下していると考えられ、それによる影響であるとも言える。しかし、これを体験過程様式の観点から捉え直すと、ジェンドリン (1999b) が「私たちが外側から眺めた場合に体験過程の暗在の働きの存在すべきであるのに、現実にはそれがなく、過程を跳び越えた構造と、その構造をとりかこんでいて、それを形成する可能性を秘めている体験過程だけが存在するにすぎない」(p.205)と述べているように、Aさんにとって戦争という体験は、事実を後世に語り継ぐものとして構造が拘束されていると考えられる。

ここで回想法について考えてみると、回想法は「過去を語ることで自分の人生と折り合いをつけ、自分の人生を以前よりも誇りをもって肯定的に受け入れることができる」とされる(黒川、松田、丸山ら 1999, p.9)。しかし、山口(2000)は回想法において出来事を羅列的に報告する人は、葛藤の統合を試みていないという結果を報告している。そこで、参加者にとって効果的な回想法が行われた場合と、行われなかった場合を仮定する。体験過程様式が重度に構造拘束されていると、羅列的な出来事の語り開始してしまい、セラピストや回想法グループの

参加者と思いを共有することができず、その過程で生じる高齢者自身の過去への肯定的な意味付けがなされないことが推測される。この場合、過去に対して何らかの葛藤を抱えているとしても葛藤は統合されないと予想され、それは高齢者が葛藤の統合を試みていないことによるのではなく、ジェンドリン (1999a, p.107) の記述する「体験過程の狭窄」によるものであると考えられる。認知機能の低下によって、高齢者は体験過程が狭窄され、自らが歩んできた人生を新鮮に捉え直すことが困難になる。また、過去にたとえば葛藤があったのならば、それらを新たに展開する (carry forward) ことによって葛藤を処理していくことが困難であるということが考えられる。

今後の課題

以上より、高齢者、特に認知機能に何らかの障害がある高齢者の体験過程は構造が拘束されているということが考察された。このような構造拘束の視点から高齢者の認知について考察された研究はこれまでになく、今後高齢者の心理について新たな研究が進むことが期待される。

凍結された全体として語られる体験が緩和されるには、現在のことを伴った体験として体験が再構成される必要がある。再構成するとは、「過程が、以前には進行していなかった点において新しく進行するようになってきて、暗在的に機能するという意味である」(ジェンドリン, 1999b, p.207)。再構成されると、Aさんの語りも口調が生き生きするだけでなく、体験過程様式までもが生き生きとしたものになるだろう。本論文は心理的治療ではなく日常的なものをテーマとした面接をもとに考察され、また事例数も少ないため、高齢者の体験過程はどのように再構成化されるのかということまでは言及することができない。今後、高齢者の体験過程様式の再構成化について研究されることが望まれる。

付記

論文執筆に関してご指導頂きました池見陽先生、調査にご協力頂きました社会福祉法人みささぎ会理事長奥田益弘先生を始めとする職員の皆様、認知症予防推進プロジェクト推進室畑八重子先生、桑田直弥先生、そして快く引き受けてくださったAさん、Bさんに心より御礼申し上げます。

文献

- Gendlin, E. (1978): *Focusing*. New York, Bantam Books. ジェンドリン, E. (1982) 『フォーカシング』 (村山正治、都留春夫、村瀬孝雄 訳) 福村出版.
- Gendlin, E. (1996): *Focusing-oriented psychotherapy: a manual of the experiential method*. New York, Guilford Press. ジェンドリン, E. (1998) 『フォーカシング指向心理療法 (上)』 (村瀬孝雄、池見陽、日笠摩子 訳) 金剛出版.
- Gendlin, E. (1990): *The small steps of the therapy process*. In *Client-centered and experiential psychotherapy in the nineties*. Leuven, Leuven University Press. ジェンドリン, E. (1999a) 体験過程療法 (池見陽、村瀬孝雄 訳) 『セラピープロセスの小さな一歩: フォーカシングからの人間理解』 金剛出版 pp.75-138.
- Gendlin, E. (1990): *The small steps of the therapy process*. In *Client-centered and experiential psychotherapy in the nineties*. Leuven, Leuven University Press. ジェンドリン, E. (1999b) 人格変化の一理論 (池見陽、村瀬孝雄 訳) 『セラピープロセスの小さな一歩: フォーカシングからの人間理解』 金剛出版 pp.165-231.
- 権藤恭之 (編) (2008): 『高齢者心理学』 朝倉書店.
- 原千恵子 (2008): 認知症高齢者への治療的関わり: 箱庭療法の可能性 『心理臨床学研究』 25 (6): 636-646.
- 市岡陽子 (2000): 体験過程理論に基づく高齢者心理の研究 『心理臨床学研究』 17 (6): 550-559.
- 石合純夫 (2003): 『高次脳機能障害学第2版』 医歯薬出版株式会社.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2012): 総人口年齢3区分別人口及び年齢構造係数—出生中位推計— 国立社会保障・人口問題研究所 HP: http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/h1_1.html (最終アクセス日: 2013/1/9).
- 黒川由紀子、松田修、丸山香、斎藤正彦 (1999): 『回想法グループマニュアル』 ワールドプランニング.
- Sherman, E. (1987): Reminiscence Groups for Community Elderly *The Gerontologist* 27 (5): 569-572.
- 田島信元、長沼君主、石毛順子 (2008): 認知症高齢者の脳機能賦活に及ぼす学習者・学習療法スタッフ間コミュニケーション活動の影響: コホート研究 『白百

合女子大學研究紀要』44：129-145.

山口智子（2000）：高齢者の人生の語りにおける類型化の試み：回想についての基礎的研究として 『心理臨床学研究』18（2）：151-161.